

# わせたん失恋部

早稲田短歌会の学期末の酒の席で、「なにを詠んでも失恋になっちゃう時あるよね」と盛り上がり、勢いで発足しました。実際の失恋経験が背景にあるという保証はありません。

沈んだ部屋

尾崎秋南

音もなく花瓶の水を飲み干してただ愛でられる存在となる  
空き部屋にどんどん家具を置くときの手続きめいた触れ方だった  
開けるためではなく拒むためとして部屋に扉があつてよかつた  
沈黙に致死量のあることを願う桜並木が春のボンベイ  
ディストピアならディスコミュニケーションだ「かわいそうだ」の主語で争う  
また間違えたって分かる 脳内のウサギを一羽ずつ絞め殺す  
冬の陽の淡さでわらう人としてあげられることの少なさ  
夏の日に水やりをする気軽さでしたことだって、そう受け取って  
縁語より強く繋がる岸と舟 もうどこにでも行けるはずでしょ？  
Memories in the ……と書いて続かない水没を余儀なくされた声の墓碑銘

轍

加賀塔子

喪ひしふたつの恋をおもひだす帰省に古き押し花みれば  
ぎんいろの自転車まはるあの夏の道すちはわが胸に残れり  
幼くて君傷つけ臆病な獣は治療の針をおくれる  
いま一日会ふことあらば病むわれをいかにおもふか六度目の夏  
水たまりが轍にゆがむ言はなくてよかつたはずの言葉ばかりで  
不完全の意味を英語にもつと言ふ檸檬まはりつつ落ちゆくレモン  
けらけらと車輪はまはる言ひすぎしおろかなわれはどこまで行くか  
いまひとめ名前だけでも君の住む町の紙面に歌をおくりき  
唯一の君との写真海近き異国の街に失ひたりき  
一日の感情を押しあててゆくアイロン台を最後になでる

感触と思慮

関寧花

人の指におもちゃの指輪をはめたとき怖くて途中でやめてしまった  
それぞれに最良の真実があり一緒にながめていた夏の川  
さみしさは警鐘だよな いつまでも持ってた電話番号を消す  
取り込んだ洗濯物の上で寝た信じる以外の道がなかった  
七里ヶ浜の波の強さを言うときにそこにある夜の濡れている砂  
邂逅を望むことすらもうなくて歩いたツユクサをつみながら  
しるたえのシングルベッドに横たわり優しさと愚かさの線引き  
手に垂れたソフトクリームを舐めながら思い出すまだ許せないこと  
どうにもならないことは前から気づいてて明け方の月を消えるまで見る  
行きそねた寄席のことばかり考える 季節を越えるのは怖くない

秋には完璧になる

染川嚶実

わたしにも八月がありあなたにもそれがあるとき兆す暁の  
まだ愛しくならないままで失ひはここにあること、ここは瞳  
呼ぶことなくなった名がせりあがる 湖はわずかに満ち干きをして  
口腔に添わせるように繰り返し呼んでいた名が攀れたまま来る  
歯並びの壊れたとこに舌を入れ告げぬことみな熱かった夏  
へ元カノとあなたを既に呼び慣れて過ぎてきたのか逃げてきたのか  
いなくてもいいも季節が何気なく濃い日があつて壊したい背  
互いしか知らないことを抱き合えば殖やせた夜、もう明けていいのに  
さむいことと、さみしいことを間違つて季節は一度そこで壊れて  
春あなた、夏にあなたを好きなたし、秋には完璧になる離散は

自然誌拾遺

高良真実

海岸に至り列車のまがるとき鼻をくすぐるみじかき髪よ  
旧友であれば日傘に誘へども仁王のごとき肢体を曝す  
山折りと谷折り、きみの折る鶴のからだに深く息づく山河  
語るほど組手のときのまくろなるまなこへ鮮しきまで日射し  
竜骨のとがりの意味を知るまでの十年飛翔まぎはの模型  
顕微鏡がきみの両眼をおほふ間は無防備 とてどもとて触れ得ぬ  
ウミガメのどに逆だつ棘あまた生きるためには飲みこむべけむ  
古地図の上では海となる街へ白雨 すべては昔の話  
恋人があると解つてをればこそ 帰れ 互ひに交はらぬ道  
忘れるといふは夜空へ消ゆる星いまだ火星のあかるきままに

寄稿者（五十音順）

- 加賀塔子(かが とろこ) Twitter: @qwk\_rk  
早稲田短歌会、かりんに所属。おいしいごはんがたべたい。これを京都で打っています。
- 尾崎秋南(おぎき あきな)  
早稲田短歌会所属 蠍座 好きな人の前だと少食
- 関寧花(せき ねいか)  
早稲田短歌会、短歌同人「ぬばたま」所属。サーティーワンアイスクリーム<sup>TM</sup>の無料引換券を使わないまま秋が来てしまいました。
- 染川嚶実(ぞめかわ つぐみ)  
早稲田短歌会所属。かき氷の評論家を目指して日々研鑽を積む。
- 高良真実(たから まみ) Twitter: @nukimidoru  
早稲田短歌会所属。早生まれ。このアンソロジーの編集人。おにぎりの具は油みそ派。